広瀬敏通

みくに出版

は、この時点で誰も想像していなかっただろう。 そのとき、突然大きく建物が揺れた。この地震が、日本の国自体を揺るがす大災害になると ク組織「日本エコツーリズムセンター」(以下、エコセン)の東京事務所で、地域コーディネ ・ターの研修会を行っていた。荒川区西日暮里のビルの2階にある会議室で講義をしていた 2011年3月11日、私は自分が代表を務める自然学校や環境教育団体などのネットワー

環境教育や野外教育に関わる団体などに呼びかけて、東日本大震災救援のための組織「RQ 始め、20日には宮城県登米市に現地本部を設置。エコセンに参加している全国の自然学校、 カ所を加えた計8カ所のボランティアセンターを中心に、2011年末までに延べ4万 市民災害救援センター」(以下、RQ)を結成した。RQとはRescueを略した造語だ。 刻も早く救援活動を開始することで、ひとつでも多くの命を救おうという思いを込めた。 RQはエコセンの東京事務局に設置した本部に加え、宮城県内に5カ所、岩手、福島の2 私たちは、ただちに現地調査に向かい、ボランティアの活動拠点をどこにすべきか検討を

トンにおよぶ救援物資は、100日間で550カ所に届けられた。 5000人のボランティアたちと活動することとなった。全国の支援者から送られた400

復興に必要な「被災地型の自然学校」

復興支援を行う地域に根づいた市民活動をめざして動き始めた。新たに「RQ災害教育セン ター」を設立して、その意志を引き継ぐと同時に、地元の皆さんと協力して、 そこで私たちは、さまざまな専門家と協力してRQの活動をさらに発展させ、被災地支援と の企画や、仮設住宅の女性たちが作る手織物の販売まで、たくましく多彩な活動を生みだし い漁業や農業の支援のほか、子どものためのキャンプや遊び場を運営したり、被災地ツアー な支援活動を終了した。しかし、被災地の状況は被災直後からほとんど変わっていなかった。 2011年11月末、RQ市民災害救援センターは緊急支援期を終えたと判断して、組織的 人手が足りな

野外教育や自然体験活動はもちろん、地域のさまざまな課題解決にも取り組む民間の環境教 支援活動も、そうした自然学校のノウハウを活かして行われてきた。 育団体の総称だ。全国で約3700校あり、近年では国が運営する自然学校もある。RQの 私はこうした活動を「被災地型の自然学校」と呼んでいる。自然学校とは、子どもたちの

何より忘れられることが最も辛いのだ。 10年、20年と長く続いていくだろう。被災者の苦しみはすぐに消えることはない。そして、 今後、ここで生まれた活動は、被災地の人々との友人や親戚のような付き合いを通して、

多くの災害・紛争現場に立ち会った者として

質を解明できる重要なフィールドだ。世界各国の大学がこぞって研究を行っているが、なぜ 家として世界各地をまわっている。火山噴火によってできる火山洞窟は、火山やマグマの性 もちろん、地質学に興味はあるし、火山洞窟に関しては自ら洞窟に入って調査も行い、専門 までも実践家の立場からだ。こういう人間を世間では在野の研究者というのかもしれない。 たが、地震学者でも防災学者でもない。地方の大学で防災学を教えてはいるが、 か日本では非常に地味な学術分野のようだ。 私は阪神・淡路大震災以来、災害が起きるたびに現地に入って救援活動に関わり続けてき それはあく

動き回っていたために、日本政府の難民救済の現地駐在員に仕立てられて医師や看護師と働 NGOを作り活動してきた。20代も終わりに近づいたころにはカンボジア難民救済の現場で また、私は20代の多くの時間をアジアの辺境で過ごし、障害児の村づくりや難民の救援の

こうした現場で見る人間の姿はとても印象深い。そのときの行動や心理を思い返すだけで、 一冊の本が書けるくらい数多くの興味深い事柄を体験してきた。 思えば私はずっと現場にいて、災害や紛争など非日常の独特な秩序のなかで働いてきた。

く掘り下げ、さまざまな切り口から災害の全体像を浮かびあがらせたいと考えた。災害を客 ナー「災害と減災」全6回分の講義をもとに書き起こしている。 っていた。本書は、その念願が叶って、2012年から2013年にかけて行った連続セミ セミナーでは学者や行政の目線ではなく、市民の目線で「災害を正しく恐れる」意味を深 十数年前から、私はそうした自身の経験を踏まえた災害に関するセミナーをやりたいと思

分は死なない!」という自信と確信を持っていただけるように工夫したつもりだ。 紛争の現場をお伝えしたい。さらに、本書を読んだ方が、来たる巨大災害に直面した際に、「自 観的に理解するなら巷にはたくさんの専門書がある。この本では、私が体験してきた災害や

災害に際して最も重要なのは死なないことだ。そこから、次のステージが始まるのだから。

広瀬敏通

はじめに 001

災害大国 日本

∞ 災害の種類 気象現象の極端化で増える災害

025

023

◆ 気象災害

―1年に台風26、竜巻24、土砂災害1000件が日本を襲う

025

□ 災害とは何か 災害は人のいるところに生まれる

DOCUMENT 3・11 都内も襲った大きな揺れ

018

017

8 災害が集中する日本列島 038

地震災害 火山災害

3・11以降、極端に高まる巨大地震発生の確率

034

世界の活火山1548座のうち110座が日本にある

029

◆人口密度世界第5位の日本に、多くの災害が集中 038

◆ プレート境界は地震の巣―――プレートが4枚もぶつかる稀有な国、日本

039

042

□ 国土と民をうるおす災害 災害は美しい自然景観も育む

◆ 災害と自然の恵みは表裏 一体――災害は恵みをもたらす 火山の恵み ――肥沃な土壌と清廉な水、レアメタルやエネルギーももたらす 042

地震の恵み 変化に富んだ地形をつくり、多様な生態系と生活文化を育む 046 044

台風の恵み 大気や海洋を浄化し、森を更新する 048

◇ 知っておこう 災害は繰り返す ── 平安時代と江戸時代の自然災害 050

DOCUMENT 被災後の神戸で感じた、すがすがしさと前向きな力

054

053

目 次

□ 農村国家から急激に都市化した日本
 戦前は特別だった都市の生活

- ▼三大都市圏に人口の50%が暮らす現代の日本 55
- 世界一リスクの高い都市、東京――行政も経済もインフラもすべてが東京中心 061
- ◆ 災害に弱い 一極集中国家 ――効率性が高いシステムは一気に崩壊 063

□ 都市を襲う巨大災害 集中化・密集化が招く都市型災害 067

- ◆ 水害――舗装された都市は雨水や河川氾濫で水没する 07
- ・火災――大地震で都市は火の海に変わるの
- インフラ・情報の途絶 ---情報の収集は被災後の10分間が勝負 072
- 帰宅難民―――首都圏では人口の半分が帰宅困難者になる 06物流の途絶―――緊急物資、医薬品、食料、水さえも入手困難 04

□パニックと災害 災害時のパニックで暴動が起きるというのは真実か

077

- ◆ パニックとは何か?-―過去の事例から見るパニックの典形 077
- 、パニック神話とエリートパニック――パニックへの不安が招く新たな惨事 080
- 正常性バイアスの罠―――人はみな自分だけは安全だと思いこむ 83

目

次

□パニックに左右されない冷静で適切な情報伝達が不安を消す 「むやみに動くな」は正しいか?――大切なのは「正しく動く」こと 18 自然の中で学ぶパニック回避術 防災訓練の抱える問題 防災と減災――災害を、防ぐ、から、減らす、へ ――予定調和のセレモニーと、高齢化による人手不足 ――真っ暗な洞窟でパニック心理を体験 104 110 106

110

B 今すぐできる減災の工夫 災害が来る前にやっておこう 115

②家の中にもヘルメット 118

❶住まいの耐震化・耐震補強と、家具の固定

116

◆私が薦める6つの工夫 15

❸通勤・通学路や職場の危険を知る 118

◆家族、身近な友人との緊急時の備え 19

⑤ ご近所といい関係を 19

●非常持ち出しと備蓄を開始する 20

自助、共助、公助 自分自身のライフラインを確保する -阪神・淡路大震災の被災者の8割は隣人が救出 -家族構成や健康、住まいに応じた備えを 123

120

第二二部

災害から生き残るために

◇ 知っておこう もしライフラインが断たれたら? これだけは備蓄しておこう(26

お年寄りや子ども、障がいを持つ人のことも忘れずに

124

♥災害が起きたら130

リスクマネジメントの大原則

130

130

●自分が助かったら

131

□災害が来た! 尊い命を助けるために

生き残るための知識と行動

おぼえておこう

♥目の前で助けを求めている人を

見てしまったら 131

129

129

目

次

g助かるためにできること

建物の中で災害に遭遇したら 132 132

◎廊下やベランダなど逃げ道を確保 133

♥ガスの火は自動で消える。とにかく外へ ♥トイレや玄関をシェルター代わりに 134

134

♥頭を守り、塀から離れる

134

♥助けを呼ぶ笛を携帯しよう 35

♥激震は街路樹に抱きついてやり過ごす 135

♥駅や学校、職場の非常口の確認を

135

136

もし、通勤や通学の途中だったら

137

♥地下道は揺れには強い 137

♥揺れが収まったら広い場所へ 138

●海岸、河川沿いでは高所に逃げる

138

都市の地震は火災が怖い

♥頭上と周囲をよく見て歩こう

137 136

♥ハザードマップを見ておこう

140

♥地面が崩れる場合もある

138

●路上では狭い歩道が最も危険

♡高層ビルでは柱につかまり ♥キャスター付きの家具は凶器

揺れに耐えよう 36

142

♥火災時は風上に逃げろ

140

♥荷物は少なく頭には防災頭巾を 142

g 災害時に平常心を保つために ●体を動かしてリラックス 極度の緊張をやわらげるには ♥電車は中ほどの車両に乗る 乗り物では、乗車位置で安全度も変わる ♥あめ玉を常備しよう ♥帰宅困難者の行動心得10か条 (東京都) 会社から自宅まで、災害前に一度は歩いてみよう ●車で移動していたら ♥死の煙を避ける2つの技。 ♥燃えやすい化繊に注意 144 142 148 144 ほふく前進とゴミ袋ボンベ 146 148 ♥飛行機は翼の付け根の席に ♥戦場でも使われる 「4カウントメソッド」 148 143 144 146 149

災後社会に私たちができること

151

*5 * つながろう 災害ボランティア ─────

151

DOCUMENT 被災者もボランティアも同じひとりの人間として 152

■災害ボランティアとは何か ───── 17

◆ ボランティアとは何か――求められる、緊急性、自発性、専門性 157

・災害ボランティアの歴史――昔から助け合い、災害を乗り越えてきた日本人 159

ω 災害ボランティアができること 役割も仕事も多種多様

163

- ◆ 被災地支援で求められること--段階によって変化するボランティアのニーズ 163
- ◆ 災害ボランティアの種類 164
- ボランティアリーダーの役割 安全管理から役割分担まで、グループのまとめ役 165

◎ボランティアリーダーに求められること 167

- ボランティアコーディネーターの役割 ◎ボランティアコーディネーターに求められること 169 - 自治体等と連携し活動の場と体制をつくる 167
- ・ボランティアのためのボランティア——現場のボランティアを支える縁の下の力持ち 170

ボランティアを邪魔者にしないために

必要とされるボランティアの受け入れ体制 174

災害ボランティアの受け入れはなぜ中止されたか――福祉分野とは性質を異にする災害支援 ・支援の足をひっぱった「ボランティア迷惑論」――公的支援と民間ボランティアの混同が元凶 174 176

、災害ボランティアのジレンマ――モンスターボランティアもいる 178

他人事だった災害を自分事にとらえ直す 「災害教育」— -被災地が若者を変える

181

◆ ボランティアは学びの場 - 利他的貢献と同時に得られる学びと成長 181

◆「災害教育」で現場を学ぶり ――緊迫感、高揚感、絶望感が支配する特別な環境 183

被災地という災害現場から学ぶる ――被災者に共感し当事者として関わる 186

日

誰もが被災者となる「災後社会」

他人事の感覚は通用しない 復興に、私たちができること すべての世代が、ともに安心して暮らせる地域再生を 地域再生はどう進めるか 「リスクコミュニケーション」の構築で災害に強い社会を |災後社会に生きる|||-----| **DOCUMENT** 民間ボランティアから始まる、未来を見据えた支援 ◆ 大地震は長期間にわたって国土を揺るがす! 復興計画とコミュニティの再生 災害に脆弱な社会と弱者 ――社会変化や格差が災害弱者を生み出す -地域の特性や伝統に配慮した計画を -東日本大震災で地盤に歪みを抱えた日本 196 206 202 209 206 200

200

195

◇知っておこうこんなにある、ボランティアの仕事

被災地支援ネットワークの継続が大切

-活動を継続させよう

災害に負けない社会づくり――10メートルの防潮堤が本当の復興なのか

209

行政のすべきこと――災害に強いまちづくりと、防災体制や連携の強化 211

市民ができること -被災地へ出向いて、災害を自分事とした支援を 212

大学ができること 教育や研究による社会還元と若年層の地方還流を

213

学生ができること-一若さを活かした支援と、地域を支える人材に

企業ができること-――本業を活かし、復興ビジネスで本格的な支援を 214

◆ アメーバ型組織が地域を救う--自立した支援組織に求められること 218

ヒエラルキーからアメーバへ 219

おわりに

225

参考文献

228

山崎玲子 猿田詠子

ブックデザイン・DTP 山中俊幸(クールインク) 編集協力

目 次

016

母 持続的な支援のために

柔軟で自立した組織が多彩な活動を生む

災害大国 日本

*1*災害と向き合う

突き上げるような縦揺れは、体が覚えている。「震源は離れた場所だ」 と直感的に確信した。 会議室にいた。研修も最終セッションに入り最後の講評を行っていると、 アンズムセンター (以下、エコセン) の研修で東京、西日暮里のビルの日本大震災が走って、これと いきなり大きな横揺れが来た。これまで震源地で体験した直下型地震の

た。「窓から顔は出さないように!」と注意を促しながら外に目をやると、 のビルも、こっちのビルも」と声をあげ、思わず窓にしがみつく人もい 目の前にあるJRの架線鉄塔もぐらんぐらんと揺れていた。 扉を開けに走った。外を見ていた人が「スカイツリーが揺れている。あ 大きな横揺れは長く続いた。エコセンの事務局メンバーが非常階段の

送で情報を収集していた研修生が、震源地と地震の規模をキャッチして みんなに伝えた。地震の規模から、交通の寸断や物資の流通で大きな混 らも不安そうな顔をした人々が続々と集まっていた。携帯のワンセグ放 全員が揃ったところで裏手の高台にある公園に向かった。近隣のビルか 「今のうちに脱出しよう」。私はそうみんなに呼びかけて外に出ると、

> 3.11 都内も襲った大きな揺れ

DOCUMENT

乱が起きると予想された。

生の大半は東京周辺に知人や親戚がいるという。エコセン事務局メンバ 動を開始した。 の電話番号と研修生のメールアドレスを教え合い、暗くなる前に各自行 なる。入手した情報では都内の交通はすべて止まっていた。幸い、研修 を立ち上げて動くことになるだろう。救援本部はエコセンに置くことに ら今後の行動について話し合った。これまでの災害と同様に、救援組織 の自宅は歩いて通勤できる範囲だ。緊急連絡先として、私とエコセン 余震の頻度が収まるまで2時間ほどの間、私たちは公園で待機しなが

宅をめざして一方向に歩くおびただしい人の波が続いていた。 すでに棚から消えていた。仕方なく、何事もなかったかのように営業し ている街中の食堂で腹支度を終えて事務所に戻ったが、市街の道には自 を調達しようとコンビニに向かったが、おにぎり、弁当などの食品は 修生だった。「何とか車を手配して現地に向かおう」。そう考えて食料 私とともに事務所に残った数名は、震源となった東北方面から来た研



都心の道路は帰宅困難る と自動車であふれていた

予備タンクにガソリンを補充した。 買えるガソリンは10リットルまで。仕方なく何カ所ものスタンドに並び、 すでに都内ではガソリンの入手が困難になっていた。高速道路も閉鎖さ 私たちはエコセン副代表の山中俊幸氏の運転する車で福島に向かった。 めた。ガソリンスタンドには長い行列ができていた。長時間並んでも、 民家や大谷石の立派な石塀が、軒並み倒壊している状況が目につきはじ 都心に向かう車の渋滞が目立ち始める。栃木県に入ると、屋根の落ちた れていたので、国道4号線をひたすら北に向かう。埼玉県境あたりから とボランティアの手配、銀行口座の開設準備などを行うと、13日の早朝、 翌12日、エコセン救援本部の設置準備で各所に連絡を取り、物資搬入

ラジオからは放射能が環境を汚染しつつあることを匂わせる報道が頻繁 間もかかっていた。そこで宮城から来た仲間と合流して情報を交換する。 に流れ始めていた。この状況では福島に救援活動の拠点を置くことは困 難だと判断し、いったん東京に戻って態勢を立て直すことにした。 17日の夜には、全国のエコセン世話人と、自然学校や環境教育系の主 福島に着いたのは真夜中だった。ふだんなら3時間で走る距離に12時



2011年3月17日夜、被災 地救援のためにエコセン東 京本部に60団体が集まる

だった全国組織のメンバー総勢6団体がエコセン東京事務所に集まって 本部を立ち上げて現地救援に取りかかることが決まった。 いた。これまでの経過説明と入手し得た現地報告を行い、ただちに救援

ンチームが現地被災者に届けるという連携支援だ。 トドア用品メーカーの義援隊と合流する。義援隊が集めた物資をエコセ 1年の派遣は18日。物資を満載した車を連ねて仙台に向かい、アウ

寄せ合っていた。 に張ったブルーシートのなかに、暖房もないまま人々は凍えながら身を が溢れていた。ガソリンが途絶え動かなくなった車、崩れた倉庫、庭先 現地では、これまでの災害と同様、指定された避難所の外にも被災者

車を原型も留めないほどに潰し、家を波の形に削り取っていた。巨大な ほとんど見られなかったが、30メートルを超える津波は電柱をへし折り、 は静かな墓標のように見えた。そのなかを厳しい表情で歩いている人を 悪魔が街をすき間なく踏み潰したような景色のなかで、手付かずの瓦礫 阪神・淡路大震災で見た、ぺしゃんこの家が延々と続くような被災は



無慈悲で絶望的な破壊が 延々と続く気仙沼階上・鹿 折地区

見かけたが、とても声をかけることはできなかった。

ることができた。同時に、

救援組織は

「RQ市民災害救援センター

という名称に決まった。市民による災害救援組織の誕生だった。

東京の事務所には、全国からの支援物資が続々と集まり始めていた。

ととなり、20日には宮城県登米市に廃校となった小学校の体育館を借り

その後、エコセンは被災地にできるだけ近い地域に活動拠点を探すこ



RQ市民災害救援センター現地本部をおした宮城県登米市の小学校



零下10度の冷え込みのなかでのミーテング



被災者に緊急支援物資を届ける活動を行ったRQのボランティア

DOCUMENT

災害は人のいるところに生まれる **災害とは何か**

私は火山やエコツーリズムなどの調査で、この地に10年近く通い続けてきた。 半島だ。人口31万人、半島の面積は日本の約1・3倍。火山が多いことでも知られている。 もし、今この半島で火山が大噴火を起こして森が燃え、野生動物が大量に死に、溶岩に埋 カムチャツカ半島はユーラシア大陸の東側、オホーツク海と太平洋の間に位置する大きな

町は数えるほどしかなく、住民の大半は首都のペトロパブロフスクに住んでいる。カムチャ ツカの人口密度は1平方キロメートルあたり、わずか1人未満で、日本の縄文時代前期に等 人間さえいなければ、ただの自然現象にすぎない。人間や都市が被害を受けて、初めて「災 しい。火山が噴火しても人間はほとんど被害を受けないはずだ。火山噴火も地震も台風

め尽くされたとしても、これを誰も災害とは呼ばないだろう。広大な自然のなかに人の住む

害はなかったのかといえば、決してそんなことはない。 が国で災害という概念が生まれたのは弥生時代だといわれている。では、縄文時代に災 害」と呼ばれるのだ。

01★災害とは何か――災害は人のいるところに生まれる